

小野五郎先生の学問と人となり

国立大学法人埼玉大学
理事兼副学長 貝山道博

小野五郎先生は本年3月末をもって埼玉大学経済学部を定年退職される。これまで経済学部の中心にあって、経済学部および本学全体の発展に多大なる貢献をされてきた。制度上の規定のため本学を去られることになるが、大変残念に思うと同時に、これまでの先生の教育・研究での御奮闘に改めて敬意を表する次第である。

小野先生は平成4年10月に本学経済学部へ赴任された。翌年度から大学院経済科学研究科を設置する計画の最中、いわゆる大学院設置要員として招聘された。当時私は田中一盛経済学部長のもと大学院設置の仕事に携わっていた。設置実現のためには空きポストを有することは許されなかったため、早急に人事を進めていた。特に、ミクロ経済学は重要なポストの一つであったが、社会人主体という新構想大学院の性格上、理論に偏った人材ではなく、理論・政策を踏まえ実証もできる人材を求めていた。そのため、当時の経済企画庁（現内閣府）の顧問（前事務次官）などのところへ、推薦をお願いしたりもしていたが、適当な方が見つからなかった。そんなとき、田中学部長から小野五郎先生ではどうかという提案があった。今考えると、田中先生には当初から小野先生を最有力な候補の一人と考えておられたようで、いろいろ手を尽くしたという形を整えた上で本命を提案するという戦術があったように思われる（田中学部長は以前本学大学院政策科学研究科で小野先生とご一緒された時期があったとのこと）。さっそく学部長室から当時信州大学経済学部におられた小野先生にお電話を差し上げ、先生のご意向をお伺いした結果、小野先生からご快諾をいただいた。これで大学院が立ち上げられると確信し、その日は田中学部長と二人で痛飲し、喜びに耽ったことを今でも覚えている。

しかしながら、小野先生には謝らなければならないことがある。ミクロ経済学担当ということでお呼びしたが、実際に担当されたのは経済政策および産業政策であった。学部、大学院の授業担当者の配置を考えたとき、どうしても小野先生以外に経済政策や産業政策の担当者が見つからない。とうことで、お誘いの条件をこちらから破ってしまうことになってしまった。にもかかわらず、小野先生にはこれを呑んでいただいた。約束を違えて誠に申し訳なく思っている。

小野先生は昭和41年4月に東京大学経済学部を卒業し、直ちに通産省（現経済産業省）にお勤めになった。その後、アジア経済研究所や信州大学経済学部などを経て、前述の通り、本学経済学部に来られたわけであるが、小野先生のスケールの大きさ、スタンスの広さの一端を知る良い材料として、アジア経済研究所へお勤めの前後に書かれた一連の作品がある。例えば、昭和62、63年には、「より普遍的価値観の創造——動態系としての価値観の相違の克服——」（第5回金子賞第一席受賞）、「多価値化社会の新市場哲学」（日本経済新聞 New Being 論文優秀賞受賞）、「新広域経済圏『ホロン・ポリス』の提唱」（第5回高橋亀吉賞受賞）、「世界語としての日本語の優位性」（日本未来学会『日本語の未来』佳作受賞）、「東京人の『ふるさと創生』論」（朝日新聞『私のTOKYO改革論』佳作受賞）といった作品がある。小野先生のホーム・ページには、「外部から学界に参入する場合、なかなか研究業績が挙げられません。そこで、狙ったのが、外部の者が参加できる懸賞論文です」と、謙遜して書かれております

が、すべてが受賞の対象となることは常人ではできないことだ。小野先生の天賦の豊かな発想力と通産省という土壌で培われた知見の賜と思われる。

本学在任中にも実に様々なインパクトのある作品を世に出しておられる。私の独断でいくつかピックアップしてみるが、『実践的産業政策論 — 日本からの教訓』（(財)通商産業調査会, 1992年）（これはかの有名な世界銀行著『東アジアの奇跡 — 経済成長と政府の役割』（東洋経済新報社）において、引用・参照されている）、『産業構造入門』（日本経済新聞社, 1996年）、『現代日本の産業政策』（日本経済新聞社, 1999年）、『ホロニック工学論 — どうすれば永続可能な人類社会が構築できるか』（(財)富士社会教育センター, 2005年）などがある。何れも優れた力作であることは言うまでもない。

この他にも、経済協力、外国人労働者、知的所有権、情報化および地球環境といった諸問題についても多々作品があり、またマスコミ等々で度々発言もされておられる。これらを拝見すれば、小野先生の問題発見・解決型の姿勢が随所に遺憾なく発揮されていることがわかる。また、趣味も実に多様で、ご関心のある方は是非小野先生のホーム・ページに飛び込んでみると良い。

多種多様な活動をされておられる小野先生のことであるから、まだまだ書き足りないところであるが、紙数の制約もあり、この辺で終えざるを得ない。

小野先生のお陰で大学院ができあがり、その後博士後期課程をも設置することができた。各界、特に官界に豊富な人脈をお持ちで、小野先生を通して大学院教育・研究指導において経済産業省や財務省などの方々のご協力を得ることもできた。このことも含めて改めて感謝申し上げたい。

小野先生の今後ますますのご活躍と末永いご健勝を祈念して、この稿を終えたいと思う。